日月崇拜の痕跡

橘　正一

―日月崇拜の痕跡―

月を拜む儀式は、今日では、月見や月待ちの様な風流な趣味的なものに退化して、わづかに、殘ッてゐるだけであるが、子供の間には、近い時代まで月を拜む習はしが殘ッてゐたと見えて、子供言葉に痕跡を止めてゐる。即ち、月の子供言葉は、神様や佛様の子供言葉と共通であり、それらは、共に、それを拜む時の言葉から來たものである。そこで先づ、月を意味する子供言葉を集めてみると、次の通りである。

あと	和歌山市
あっとさま	岩手縣氣仙郡立根村
あとさん	秋田縣由利郡
あどど	秋田縣由利郡
あとしやま	長崎市
あっとさん	和歌山市
あとさん	伊勢山田
あとさま	羽後河邊郡
あどっつァま	米澤市
あっとこ	岩手縣上閉伊郡上郷村左比内
アトーサマ	山口縣郡濃郡戸田村
アトーサン	山口縣玖珂郡柳井町
アトーハー	同
アトウサマ	對馬比田勝
あってェァさん	岩手縣下閉伊郡岩泉町
あままさん	秋田縣平鹿郡横手町
おまま	岩手縣九戸郡江刈村
とうぜァさん	岩手縣下閉伊磯鶏村小山田
とーだェさま	岩手縣九戸郡長内村
同	江刺郡藤里村
同	氣仙郡日頃市村
とうたェさま	同　九戸郡宇部村久喜
とーだェさん	同　下閉伊郡各村

同	紫波郡各村	ニンニンサマ
同	岩手郡各村	ニンニンサマ
同	二戸郡各村	ニンニンコ
同	和賀郡立花村立花	マンマイサマ
岩手縣谷内村田瀬		マンマイサン
同	岩手縣御明神村	マンマンサン
同	東磐井郡舞川村舞草	同
同	江刺郡米里村人首	同
同	東磐井郡藤衣村	同
同	二戸郡仁左平村宇矢澤	マンマンチャン
新潟縣佐渡郡金澤村		マンマンチャンブツ
岩手縣九戸郡山形村大字川井		
同	九戸郡晴山村	
秋田縣鹿角郡宮川村		
福井縣の一部		
岐阜縣高山町		
信州下水内郡		
福島縣相馬郡中村町		

同	トートーサン
同	とーどさま とーどこさま
同	とうとこさん
	とどさん
同	ナンナ
	ナンナンサマ
	ナンマサ
	のんのはん にーにーはん にんにーはー
同	とでーさま
	どだーさま
	とだーさん
同	とてさま
	トドサマ

福島縣伊達郡長岡村
宮城縣柴田郡富岡村菅生
羽後仙北郡の一部
青森縣八戸市附近
熊本縣球麻郡
滋賀縣愛知郡
大阪府三島郡高槻町
兵庫縣赤穗郡坂越村
福岡縣築上郡東吉富村
長崎縣諫早町
奈良縣高田

ノノ系統の言葉は、ありふれたものだから、別に列擧するまでもあるまい。但しこれもよく見ると、ノーノー、ノーノ、ノンノ、ノノ等と少しづつの變化が見られる。接尾語も、サマとなったり、サンとなったり、何も附かなかったり、色々である。

次に、神様の子供言葉を集めてみると、次の様である。

あったーさん	岩手縣盛岡市、其他
あっとこ	岩手縣上閉伊郡上郷村左比内
あっとさま	岩手縣氣仙郡立根村

あッとうさま　岩手縣氣仙郡赤崎村
あッとーさん　岩手縣下閉伊郡磯鶏村
あッとあッと　岩手縣江刺郡野手崎村
あと　秋田縣河邊郡
あとさま　秋田縣山邊郡
あとさん　秋田縣仙北郡
あとたいさま　岩手縣上閉伊郡土淵村
あ、とだ〻とだ〻　岩手縣和賀郡谷内村田瀬
あッたうで〻　岩手縣氣仙郡猪川村
あままさん　秋田縣平鹿郡横手町
かんかさま　岩手縣氣仙郡日頃市村
たんたん　岩手縣下閉伊郡岩泉町
とーだ〻さん　岩手縣花卷町
とーだ〻さま　岩手縣九戸郡長内村
とうだ〻こ　岩手縣岩手郡御明神村
とだ〻さま　岩手縣江刺郡米里村人首
とてさま　岩手縣西磐井郡平泉村
とてとて　新潟縣佐渡小木町
トートサン　岩手縣江刺郡愛宕村
なまなま　岐阜縣加茂郡黑川村
のんのがみ　埼玉縣入間郡宗岡村
のんの　福島縣伊達郡長岡村
のんのさま　肥前諫早町
にゃんにゃさま　東京府元八王子村
ノンノチャン　岡山縣上道郡芳野村西庄
ノーノー　鳥取縣氣高郡中郷村
ノーノーサマ　岩手縣九戸郡宇部村久喜
ノノサマ　兵庫縣加西郡下里村西笠原
ノーノサン　青森縣八戸市附近
はッとうだいさま　岩手縣九戸郡晴山村
まんまさま　
まままさん　
まんまいさま　
まんめッさま　

次に佛様の子供言葉を調べてみると、次の様である。

あとと　五島崎山村
あッとあッと　岩手縣江刺郡野手崎村
あッとこ　岩手縣上閉伊郡上郷村左比内
あッとさま　岩手縣氣仙郡上有住村
あどッつッま　山形縣北村山郡東郷村泉郷
あッてッさん　盛岡市
あままさん　秋田郡平鹿郡横手町
かんかん　岩手縣下閉伊郡岩泉町

かんかんさま　對馬比田勝
とーとさん　佐渡小木町
とーでァさん　秋田縣鹿角郡宮川村
とてゃさん　秋田縣平鹿郡横手町
なんなんさま　岐阜縣高山町
なんまんなんまん　宮城縣柴田郡富岡村菅生
にゃんにゃはー　福島縣中村町
のんの　埼玉縣入間郡宗岡村
のんのさま　福島縣伊達郡長岡村
のんのんさん　岡山縣淺口郡里庄村
のーのー　東京府元八王子村
のーのーさま　鳥取縣氣高郡中郷村
のーのーさん　岐阜縣加茂郡黒川村
のんのがみ　福岡縣樂上郡東吉富村
まんまん　神戸市
まんまんさん　肥前諫早町
まんまんちゃん　山口縣都濃郡戸田村
まんまさま　埼玉縣南埼玉郡和土村飯塚
まんまいさま　青森縣下北郡臨野澤村小澤
まめァこ　青森縣南津輕郡淺瀬石村
まめさま

次に、神様を拜む時の言葉を集めてみると岩手縣だけで次の様な變化が見られる（村名は略す）

あっとあっと
あ、
あん
あーああっと（トは發音せず）
あっとー
あっとーだ
あっとーでァな
あっとーた
ありがたしあっとーた
ありがたい○○さん
あっとでェ
あとだとだ
あとた
あった
とーだ
とーだとーだ
とでとで
とてとてはっあん
なまなま
なまなまはっあん

なむとーだェー
はァあァ〳〵
はァあ
はァあ。
はァとうだェ

岩手縣では、「堅い」を「かだェ」、「音」を「おど」と言ふ風に、頭字以外のタ行音を濁って言ふ癖がある。だから、「とーだェ」と書いたのも「とーたェ」と書いたのも、實は同じ發音である。燈臺とは發音の具合が違ふから、混同するおそれは絶對に無い。

さて、岩手縣と秋田縣以外の府縣では、大抵、默殺すると見えて、神樣を拜む詞の實例に乏しいが、琉球各地では、アートート、又はウートート、壹岐島では、アアトウト又は、アウトウト申シ上ゲマスル、肥前松浦郡大島では、アアトウトウサマ、東京府の元八王子村では、ノウノウ〳〵、兵庫縣赤穗郡坂越村の子供は、神や佛や月を拜むに、「まんまんあァ」と言ふさうである。これらによれば、月や神樣や佛樣の子供言葉が、それを拜む言葉から來た事は明かである。神樣を拜む言葉は、トート、トータイ、アートート、アートータイ、又は、それの崩れた詞と系と、南無阿彌陀系とある。その系圖は、大體、次の樣でもあらうか。

タアト系
(1) アートート……アァト……アァト……アァ……アン
(2) アートータイ……アァトタイ……アッタ。
(3) トート……ノーノ……ノノ
ナムアミダ系
(4) ナンマン……ナンマ……マンマ
(5) ナンマイダ……マンマイ……ママ。

ママ、オママは、マンマに感動詞の添はったもので、アーマンマ、オーマンマのつづまったものである。ナンダは、ノンノの訛りとも、ナンマの訛りとも解せられる。タンタンはトートの訛りである。

以上の何れにも屬しないものに、カンカン、又は、ガンガンがある。これは、鈴や鐘の音を眞似たものかも知れないが、私は、カミカミの訛りであると解したい。それは、ちようど、髮の子供言葉であるカンカンが髮髮から來たと同じ理屈である。そして、このカミカミは、神の壘語から來たとしてもよいがカミカミは元神を拜む言葉であって神をカミと稱するのも實は拜む言葉のカミから來たのであるといふ風にも考へられる。(六四頁へ)

（評釋は本號に掲出）

八〇頁「流木やだぶり〳〵と春の水」の句、書拔いて送られたものには下五「春の水」とあつたが、教科書には「春の水」とある。鳴雪俳句鈔にも新俳句にも「春の川」とある。教科書は改竄か誤植かである。

「大凧の」句の次へ追加

此邊り石泣くと云ふ夜寒かな　鳴雪

夜泣石傳說のある佐夜の中山でも通る時の作らしい、夜々石が泣くといふところに夜寒の感懷を遣つたものである。此句上五字「此の道に」とも作られて居る。

八〇頁「木枯や」の句の次へ追加

我村や月東嶺を出て孤なり　虚子

わが居村は月が東の嶺から出で、隣村もない淋しい村である事よといふのである。「孤なり」は月にかゝる如くにも見られる。

八一頁「冬蜂の」の句の次へ追加

花ちつてきのふに遠き靜心　鬼城

花の咲いてゐる間は、何かと騷々しく賑かであつたが、花が散つてしまへば、さうした浮世の有樣もきのふの夢と過ぎ去つて、またもとの閑寂な心境に立ちかへつたといふのである。「花」は櫻である事いふまでもあるまい。平凡な句意ではあるが、花の賑ひの過ぎ去つた後の澄靜な感じがよく現はれてゐて、鬼貫の「花散つてまたしづかなり圍城寺」の作が想起される句である。

（六九頁ヨリ）但神を拜むのにカンカンといふ所が發見されぬ以上これは、單なる假說に止まる。

太陽も、月や神樣と同じ言葉で呼んでゐる所がある。

ノーノー　東京府南多摩郡元八王子村
ノーノーサマ　福岡市築上郡東吉富村
ノンノンサン　岩手縣九戸郡久慈町
トーダエサマ　大阪府三島郡高槻町
マンマンサン　長崎縣諫早町
マンマンチャン

これは太陽崇拜の痕跡である。オテント樣といふ言葉なども、考へてみなければならぬ言葉である。天道といふ字をあてて居るけれども、さういふ熟語は漢語には存在しない。いや、存在しないわけではないが、別の意味である。又、道をトーと淸んで言ふ例は日本には存在しない。殊に、オテントサンは、主として、女子供の用語である。そして、女子供の用語には、漢語は少ないのが常である。けだし、この言葉は、日本國有のトートサマが、天といふ言葉の影響を受けて、頭音だけ變ッたものだらうと思ふ。この種の融合妥協は、二種の方言の接觸する境界にはよく起る現象である。琉球語のテダも、テントと音がよほど似てゐる。

尙、この文については、次のものを參照せられん事を希望して、筆をおく。

柳田國男、小さき者の聲、信濃教育昭和二年九月號
橘　正一古代宗教の言語學的研究、方言と土俗一の十一
諸　家、子供言葉、方言と土俗、二の二、